

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民博通信 no.160; 表紙,目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2018-04-17 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009029

民博通信

評論・展望

日本における地域文化研究への新たなアプローチ

日高真吾

No. 160

2018



国立民族学博物館

目次

国立民族学博物館の研究	03
日本における地域文化研究への新たなアプローチ 日高真吾	04
収集後の資料にいかに関係を付加するか 基幹研究●民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討 齋藤玲子	10
展示場とウェブ空間とのはざままで考える 基幹研究●中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築 横山廣子	12
映像を用いた博物館資料情報の再収集 基幹研究●北米先住民製民族誌資料の文化人類学的 ドキュメンテーションと共有 伊藤敦規	14
モノから信仰をとらえる 共同研究●モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相 八木百合子	16
医療者教育の文脈で人類学という学知の何が必要とされるのか 共同研究●医療者向け医療人類学教育の検討 —保健医療福祉専門職との協働 伊藤泰信	18
日本の宇宙機器製造における「ものづくり」 共同研究●宇宙開発に関する文化人類学からの接近 岩谷洋史	20
応援を考える—人間と感情の動員という視点から 共同研究●応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた 利他性の比較民族誌 丹羽典生	22
<自然>の内と外 共同研究●驚異と怪異—想像界の比較研究 山中由里子	24
国立民族学博物館所蔵「仏教版画コレクション」における 大型木版仏画 共同研究●チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究 大羽恵美	26
不確実な現実と日常の間で—第116回アメリカ人類学会 年次大会にみる中東・イスラーム人類学の研究動向 相島葉月	28
フードスケープをめぐる研究動向 河合洋尚	29
研究成果の公開	30
みんなのうごき	31

展覧
評論

研究プロジェクト

海外研究動向

研究情報

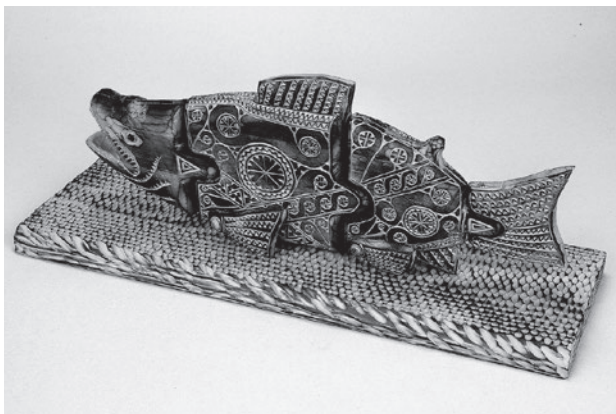
表紙写真

- ①企画展「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産」
(本誌4-9頁)
- ②個別に登録された7点の標本資料からなるモンゴル族の馬用の鞍一式
(本誌12-13頁)
- ③鬮牛と掛け声
(本誌22-23頁)

②	①
③	

民博通信 No.160

『民博通信』は、国立民族学博物館の研究広報誌です。本館において、現在計画中、および進行中の研究について、その学術的な特色、独創的な点、期待される成果などを、研究者を中心に広く発信するのが目的です。



国立民族学博物館東アジア〈アイヌの文化〉展示場 木彫「サケ」

民博通信 No.160
2018年3月30日

編集委員

宇田川妙子（編集長）
伊藤敦規
卯田宗平
藤本透子
三尾 稔

編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話：06-6879-2151
<http://www.minpaku.ac.jp/>

制作

毎日新聞大阪本社 総合事業局

【基幹研究プロジェクト】

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進します。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

【特別研究】

「現代文明と人類と未来—環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施していく。その作業を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的とする。

【共同研究】

特定のテーマについて、公募も含めて館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2～3年の期間で成果をあげる活動です。2017年度には、33件の共同研究プロジェクトが組織されています。

【基幹研究プロジェクト】

プロジェクト名	研究代表者	研究期間(年度)
機関拠点型プロジェクト/人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
○開発型		
アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017-2020
民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤 玲子	2016-2019
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	野林 厚志	2015-2018
北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	伊藤 敦規	2014-2017
○強化型		
朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田 心平	2017-2018
中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	西尾 哲夫	2017-2018
日本民族学会附属民族学博物館(保谷民博)資料の履歴に関する研究と成果公開	飯田 卓	2016-2017
日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	日高 真吾	2016-2017
楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	福岡 正太	2016-2017
中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	横山 廣子	2016-2017
北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究—民博コレクションを中心に	岸上 伸啓	2015-2017
広領域連携型プロジェクト		
文明社会における食の布置(「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット)	野林 厚志	2016-2021
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築(「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット)	日高 真吾	2016-2021
ネットワーク型プロジェクト		
北東アジア地域研究	池谷 和信	2016-2021
現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016-2021
南アジア地域研究	三尾 稔	2016-2021

【特別研究】

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
生物・文化的多様性の歴史生態学—希少動物・希少植物の利用と保護を中心に	池谷 和信/岸上 伸啓	2016-2018
食料生産システムの文明論	野林 厚志	2017-2019

【共同研究】

●は館外の代表者

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
◎一般		
課題1: 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
ネオリベラリズムの中のモラルリティ	田沼 幸子	2017-2020 ●
人類学/民俗学の学知と国民国家の関係—20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017-2020 ●
文化人類学を自然化する	中川 敏	2017-2020 ●
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷 幸代	2016-2019 ●
もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田 宗平	2016-2018 ●
捕鯨と環境倫理	岸上 伸啓	2016-2019 ●
会計学と人類学の融合	出口 正之	2016-2018 ●
音楽する身体間の相互作用を捉える—ミュージッキングの学際的研究	野澤 豊一	2016-2019 ●
「障害」概念の再検討—触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬 浩二郎	2016-2018 ●
考古学の民族誌—考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	2015-2018 ●
医療者向け医療人類学教育の検討—保健医療福祉専門職との協働	飯田 淳子	2015-2018 ●
確率的事象と不確実性の人類学—「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤 潤平	2015-2018 ●
宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田 浩樹	2015-2018 ●
個—世界論—中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	2015-2018 ●
放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原 聖乃	2015-2018 ●
応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽 典生	2015-2018 ●
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾 瑞穂	2015-2018 ●
驚異と怪異—想像界の比較研究	山中 由里子	2015-2018 ●
現代「手芸」文化に関する研究	上羽 陽子	2014-2017 ●
政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田 好信	2014-2017 ●
呪術的实践—知の現代的位相—他の諸実践—知との関係性に着目して	川田 牧人	2014-2017 ●
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	2014-2017 ●
資源化される「歴史」—中国南部諸民族の分析から	長谷川 清	2014-2017 ●
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究—保育と介護の制度化/脱制度化を中心に	森 明子	2014-2017 ●
課題2: 本館の所蔵する資料に関する研究		
博物館における持続可能な資料管理および環境整備—保存科学の視点から	園田 直子	2017-2020 ●
世界のピースをめぐる人類学的研究	池谷 和信	2016-2017 ●
物質文化から見るアプロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田 浩志	2016-2019 ●
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野 泰彦	2015-2018 ●
モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究—国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤 博昭	2014-2017 ●
◎若手		
課題1: 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
モノをとおして現代の宗教的世界の諸相	八木 百合子	2017-2019 ●
消費からみた狩猟研究の新展開—野生動物の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石 高典	2016-2018 ●
テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田 晶子	2016-2018 ●
課題2: 本館の所蔵する資料に関する研究		
高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋 淳子	2015-2017 ●

公開フォーラム
「世界の博物館2017」

日時：2017年11月3日(金・祝)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、国際協力機構(JICA)

本フォーラムは、1994年に始まったJICA(当時、国際協力事業団。現在、独立行政法人国際協力機構)と民博による「博物館技術コース」が2004年に滋賀県立琵琶湖博物館と連携した「博物館学集中コース」となり、さらに2015年から博物館が地域社会に果たす役割に重点をおく研修となった「博物館とコミュニティ開発コース」の一環として開催された。アルメニア、エジプト、ヨルダン、トルコ、ヴァヌアツ、パプアニューギニア、サモア、セーシェル、ザンビアの9カ国から招聘された10名の専門家が、それぞれの博物館事情を紹介し、あわせて博物館の可能性を

ともに考えることを目的とした。当日は多数の一般市民や博物館関係者の参加を得て、世界的な観光客を集めるエジプト、トルコ、ヨルダンの歴史や考古の博物館の紹介、サモア、パ

プアニューギニア、セーシェル、ヴァヌアツなど島嶼における博物館、豊かな自然の中で多様な民族集団とともにあるザンビアの博物館、個性的なアルメニアの音楽博物館などの発表に対して、各博物館が共通に抱える財政と人員の問題、あるいはヴァヌアツのように博物館の運営、研究、資料保存、さらには民俗資料の輸出認可まで1人で行う困難さについて、参加者からは熱心な質問がとび、活発な討議が行われた。参加者のなかには母親と来館したと思われる小学生の姿も見られ、アンケートにはフォーラムが大変興味深かったという嬉しい感想が記されていた。



国際シンポジウム
「無形文化遺産をめぐる交渉」

日時：2017年11月29日(水)~12月1日(金)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、アジア太平洋無形文化遺産研究センター、文化庁
企画：飯田卓、寺田吉孝、福岡正太



無形文化遺産保護条約に基づいて代表リストの作成が始まって以来、ユネスコのリストに記載されたものが無形文化遺産であるという理解が広がり、リストへの関心が高まっている。しかし、本シンポジウムでは、リスト記載を目指した国レベルあるいは国際レベルの政治的プロセスではなく、それぞれの社会において無形文化遺産が見いだされていく過程に注目した。その過程は、しばしば伝承の断絶への危機感を背景としており、研究機関や博物館がコミュニティと協働して調査記録活動や資料のアーカイブ化を進めて、その成果を伝承に生かす努力が各地でおこなわれている。一方、無形文化遺産が、地方政府等により社会の経済的活性化の資源として位置づけられ、観光客など外部の者を惹きつけるようになると、無形文化遺産のあり方をめぐってコミュニティ内で様々なコンフリクトを招く事態もみられている。本シンポジウムでは、アジア太平洋地域の事例を中心に、ローカルコミュニティにおいて進行しているこうした無形文化遺産をめぐる交渉の過程について議論を深めた。

平成29年度みんぱく若手研究者奨励セミナー
「グローバル現象を人類学はどのように捉えるか」

日時：2017年12月7日(木)~8日(金)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館グローバル現象研究部
企画：河合洋尚

みんぱく若手研究者奨励セミナーは、若手研究者による本研究機関の共同利用を促進する主旨のもと、2009年から開催している。今年度は、グローバル現象の人類学をテーマとして選定した。

近年、人類学では、特定の地域だけでなく、グローバルな視野から調査に取り組む研究者が増えている。グローバル化とそれに伴う問題は、特に1990年代以降、数多くの人類学者により議論されてきた。本セミナーは、こうした動向をふまえたうえで、さまざまな角度からグローバル現象について考えることを目的とした。

今回のセミナーでは、本館の信田敏宏が「グローバル支援の人類学」、三島禎子が「現象の現在と過去——アフリカ系商人の移動と文化」と題する講演をおこなった後、9名の若手人類学者が個人発表をおこなった。さらに、各発表に関するコメントに基づき総合討論をおこなった後、本館施設の共同利用について説明をおこなった。

なお、本セミナーでは、毎年最も優秀な発表をした参加者に「みんぱく若手研究者奨励賞」を授与している。今年は、中国の金山農民画を発表テーマとした雷婷氏(東京大学大学院生)が同賞を受賞した。



◆ 研究部の人事異動

- ・宇田川妙子准教授は1月1日付けで、超域フィールド科学研究部教授となりました。
- ・三尾稔准教授は1月1日付けで、グローバル現象研究部教授となりました。
- ・八木百合子機関研究員は2月1日付けで、人類基礎理論研究部助教となりました。

◆ シンポジウム等

- ◆ 公開セミナー「渡り鳥と人とのかかわりー北東アジアから考える」
日時：2018年2月11日(日)
企画：人間文化研究機構基幹研究北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点
- ◆ 国立民族学博物館・山形大学学術協定締結記念国際フォーラム「Monumentalidad y Poder en los Andes」(アンデスにおけるモニュメンタリティと権力)
日時：2018年2月19日(月)
主催：科研費基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」(研究代表者・関雄二)、科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」(研究代表者・坂井正人)、山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所
共催：国立民族学博物館、山形大学
協力：古代アメリカ学会
- ◆ 「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石—みんなで語り、みんなであつなごう」
日時：2018年2月24日(土)～25日(日)
主催：国立民族学博物館「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」実行委員会、人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」、釜石市、釜石市教育委員会
- ◆ 人間文化研究機構北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点国内シンポジウム「北の焼畑、南の焼畑—日本列島の文化を再考する」
日時：2018年3月11日(日)
企画：人間文化研究機構基幹研究北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点
- ◆ 国際シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係 Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology」
日時：2018年3月19日(月)～21日(水・祝)
主催：国立民族学博物館 特別研究「生物・文化的多様性の歴史生態学—希少動物・希少植物の利用と保護を中心に」
- ◆ みんな公開講演会「'70年万博からみんなへ」
日時：2018年3月23日(金)
主催：国立民族学博物館、毎日新聞社
- ◆ 人間文化研究機構基幹研究現代中東地域研究国立民族学博物館拠点シンポジウム「The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions」
日時：3月24日(土)～25日(日)
企画：人間文化研究機構基幹研究現代中東地域研究国立民族学博物館拠点、科研費基盤研究(B)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(研究代表者・西尾哲夫)、人間文化研究機構基幹研究フォーラム型情報ミュージアムの構築「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」
- ◆ 開館40周年記念シンポジウム「民族誌コレクションの役割とその未来—人間の理解にむけた博物館の挑戦」
日時：2018年3月25日(日)
主催：国立民族学博物館

◆ 特別展

- ◆ 開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんなへ—70年万博収集資料」
会期：2018年3月8日(木)～5月29日(火)
場所：国立民族学博物館 特別展示場